

研究ノート 雲南大理白族自治州における白族の 新文字普及運動をめぐって

著者	甲斐 勝二
著者別名	KAI Katsuji
雑誌名	中国文化：研究と教育
巻	56
ページ	L35-L43
発行年	1998-06-20
URL	http://doi.org/10.15068/00150283

雲南大理白族自治州における白 族の新文字普及運動をめぐって⁽¹⁾

甲 斐 勝 二

はじめに

雲南省は中国の西南部に位置し、チベット・ミャンマー・ラオス・ベトナムと省界を接している。タイ国境とも遠くない。この雲南省は、言語・文化の異なる多くの民族が住み、多民族多言語国家中国の面目躍如といった所だが、そもそも中国の文明自体本来そのような状況の上に広がってきたのではあるまいか。今でも上層にあるいわゆる漢語文化の覆いをめぐれば、その下にはまた別の、それぞれの地方ではぐくまれてきた言語とそれが語る文化が潜んでいるように思われる⁽²⁾。

中国という地域では、古来から政権や高度の文明に結びついた漢語による支配が拡大を続けてきた。技術や軍事力の落差により、周辺の多くの文化はやがて漢語によって語られ記される文化構造に消化吸収されてゆき、ついにはそこに組み込まれてしまい、従来のもものはその下に敷かれて次第に洗んでゆく。これが古典にいわゆる夷狄を「文化（文治教化）」した実体であろう。そして、「文化」されたその外側には再び新たな周辺が現れる。長期にわたってこれが繰り返され形成されてきたのが、今にいわゆる漢文化世界だと思ふ。その結果、近代になって「民族」の概念が叫ばれ始めた時には、漢族へ帰属する人間が圧倒的な数に上ることになった。そして、それまで漢化に強く抵抗した言語文化を持つ地域、あるいは漢化に時間が不足した辺境や山間地に残る言語文化集団が、「少数民族」の名を得て漢族と区別されるに至った、というのが概ねの実体であろう。よって、孫文がかつて「五族共和」を唱えながら、いずれは漢化により「中華民族」を作り上げようと考えたことは、ごく自然な発想だといわねばならない⁽³⁾。

近年、中華人民共和国が誕生し、民族間の平等が唱われて、その少数民族と

しての存続が保証されたとしても、しかし、古来から続いている漢語文化による少数民族への攻勢は簡単には止まるものではない。むしろ、現代の状況はいっそう厳しい。なぜならば漢語の持つ中国全体を覆う政治的な力、それが語りうる高度な文明（それは同時に高度な文化的生活を意味する）はもとより、テレビやラジオで絶えず流入する海外先進諸国や中国大都市の現代的物品に覆われた豊かな生活の姿がこれに追い打ちをかけ、辺境に暮らす少数民族としての自信やプライドを脅かす。それは文明と不可分に結びつく経済活動の場・都市へと人を導くだろう。都市での文化製品に囲まれた生活、これが近代化であるとすれば、そのためには共通語である漢語ができるにしくはない。多言語国家の中国における都市の共通語は通常漢語であり、中国の文明は漢語によって支えられているからである。

都市での豊かな生活を願うこと、これを誰が否定できよう。その結果、地方とはいえども都市に暮らす者の中には、戸籍上は少数民族でありながら、漢語しか話せない者も増えてきた。特に都市で生まれ育つ子供たちがそうである。かくて、同じ民族内でも、都市にすむ者と、山間地に暮らす者との文化・経済的格差拡大が進む。そこでは民族を繋ぐはずの言葉も失われてしまい、漢語しか話せなくなった少数民族を漢族と区別するのは戸籍だけ、という情況も起きている。このような情況に曝されて、如何にして民族集団として生き延びて行くか、民族としての言語・文化集団を強く意識する者たちにとって、これは大きな問題となる。

ここで取り上げる白族も、今、漢化の浪に曝されている中国の少数民族の一つである。

(一)

白族は総人口約160万人、雲南省大理白族自治州にそのうちの約100万人が住む。大理近辺を中心にして栄えた南詔(752—936)・大理(937—1253)王朝の末裔とされ、その文化水準も高い。明清代には科挙に何人も合格者を出しているが、南詔の時代にはもうすでに唐の文化と深い関係があった⁽⁴⁾。

その言語は、『白語簡志』(民族出版社1984/12)では、「漢藏語系藏緬語彝語支」に属すといわれるものの、まだ決め手はないらしい⁽⁵⁾。しかし漢語とは区別されるものであること、またその言葉を話すのが故に地元では漢族と区別されるという指摘は注意したい⁽⁶⁾。白語を話すこと、それが「白族」であることを証明するものと言っても過言ではないからである⁽⁷⁾。

白族はかつて漢字を万葉仮名のように使いこの白語の音を記してきたが、文字体系として成立し長く使用されることはなく、いまだ公認された文字は持たない。よって、白族の場合、識字非識字を決めるのは、中国の共通語である漢語文を読めるか否かにかかってくる。漢語文を読み書きできることが「識字」であるのならば、その前に漢語を習得しなければならない。しかし、白語とはずいぶん違う漢語を皆がみな習得できるものではないし、漢語を覚えても白語しか話されない環境に戻れば、漢語を忘れてしまう者も多い。その結果、文盲は減らず、公の経費をいたずらに浪費するばかりと、漢字「識字教育」の空しさすら嘆かれる事になる。

このような情況にあって、主張されるのが白語に即した新文字システム（白語文字方案）の制定と普及である^⑧。つまり、白族の言葉に対応する新しい文字を作り、自分たちの言葉で記せるようにしようと言うわけだ。実はこの運動は1956年から1958年頃に一度行われかけたのだが、政治状況の変化にとん挫、その時に関わった人間が「民族主義者」のレッテルを貼られて下放させられてしまった。その後1980年代に新文字制定と普及の運動が再燃したとき、このことが幹部たちを参加に躊躇させる事になる。しかし、最近では賛同者も増えた。白族自治州ではいくつかの地区で白語文字方案を広めるための運動が進められている。現在、その試用は許可されたが、この運動の目指す目標は、白語文字としての国家からの認定、公教育への応用である。

（二）

もちろん、この運動は単に白語に対応する文字を広めればよいと言うのではない。一般の「識字教育」が、文字を通じた自己表現の可能性の拡大や文化知識の獲得を目指すように、白族の新文字普及運動も、白語を使う者として表現の可能性を広げ、文化知識の向上を目指すものなのである。特に後者の面は近年になって明確に示されてきた。

例えば、1983年に作られた白語教育用テキスト『白族文字拼音読本』（初稿）に掲げられた例文には、白族の歌謡や民話の他には、小学語文掲載の文章の翻訳などが載せられているばかりだったが、1993年に文字方案の改訂を受け1995年に作られた現在では標準的な白語文字教科書というべき『白文教程』（雲南民族出版社）には、白族の歌謡と民話の他に、「電気的な安全な使用法」と「豚の病気の予防法」、また契約書や手紙などの実用文の書き方が挙げられている。これらの文は雲南省での成人識字教育用テキスト『識字課本』から取ったものだ。

「文字を知ること」が如何に社会生活の向上に結びつくか、それを示す例を兼ねたものといってよい。

白語文字の普及によって自族の知識水準を向上させようとするこの願いは、これまで出版された数少ない白語文書籍にも見て取れる。1997年春の段階では、雲南民族出版社から出版された『石宝山白族情歌百首』(1994/12)『白曲精選』(1994/3)『白文作品選』(1995/4)『白族農家致富指南』(1995/12)『快速養猪法』(1996/12)の5冊の出版を確認するばかりだが、この中には白族に伝統的な韻文を使った文芸作品の他、2種の農業技術書が含まれているのに注意したい。白族の主要産業が農業であることを考えれば、農産物の増産はその豊かな生活に繋がるはずだからである。

一般に「少数民族」といえば、しばしば異質の生活習慣や風習が強調されるので、物珍しい対象として心に浮かんでくるかも知れない。しかし、世界が緊密に結びつき、経済の網が世界を覆うとき、もはや閉じた桃源郷の世界の存続は難しい。彼らも我々と同時代に生き、同じ「現代」に曝されているのである。しかし、彼らが発展を望む時、その発展を導く先進の技術は先進の言葉で語られている現実がある。先進技術に支えられた世界に参入しようとするとき、自分の言葉でその世界を語ることができなければ、それが可能な言語で語るしかない。白族に即して具体的に言うならば、もし白語に「現代」を語る力がないとすれば、中国で「現代」を語る漢語世界に参入するしか発展の手だてはないことになる。それがなされたとき、白語を失った白族、つまり漢化されて戸籍だけの白族が誕生することは決して不思議ではない⁹⁾。

(三)

ここにおいて、興味を引くのは白族学会の援助でできた大理市湾橋地区にある「雲南大理市向陽溪白文学校」(民辦)の取り組みである。というのは、この学校は小さなものとはいえ、白族が曝される「現在」に白族として如何に対処しようとするか、その方法が示されているからだ。

この学校は1994年8月18日に、白族の著名人・楊黼の故居湾橋の老人協会内に、白語文教育の実験学校として設立された。幹線道路から遠く離れた洱海西岸の白族の農村の中にあり、夜8時過ぎに始まる夜学である。その設立の目的は、「白語を広め、白文字を広げ、人材を養成し、歴史を継承して白族文化と白族地区を振興する」事だという。当初の経費は雲南省の少数民族語文指導工作委員会から三千元を教務費としてだしてもらい、足りない分は他からなんと

か都合をつけようというもので、学生の学費は考えていない。11月の6日に実際に開学したとき入学し、1年の学期を終了したものは16才から23才までの男女を中心に48名であった。

開学1年後に出された第1回報告書によると⁹⁰、その一年間に行われた課程は、白語文字の習得を教学の中心とし、その他の学科教育を補助として、白語を使っての一般的な教育を行う事に主眼がおかれている。その具体的な課程としては、以下の10種が挙げられている。(1)《白文快速教材》(白語教育教材の学習)、(2)《白曲精選》(白族の民間芸文の学習)、(3)楊黼《詞記山歌詠蒼洱境》“白文碑”(明代の白族文化人楊黼の歌で、碑文に残るもの)、(4)《白族民歌・諺語収集と整理》“大本曲”選学(大本曲とは、白族に伝わる民間芸能の長詩のこと)、(5)党課・団課(共産党・共産党青年団教育)、(6)《法律知識》・《青年道徳修養》、(7)《農業技術一般知識》、(8)《計画生育》(一人っ子政策の実施教育)、(9)《実用技術訓練》“白族古典家具彫刻”、(10)《文化教育》。

この10種の科目をみると、確かに白語文字の習得を通じた伝統的な文芸を学ぶことに重点がおかれているのだが、それだけではなく農業技術や実用技術(白族の場合は農業が産業の中心だが木工技術も伝統的に有名である)といった経済力向上のための生産技術の習得にも白語による教育の重点が置かれていることが分かる。辺境の農村にすむ白族が今後如何にして生き続けるかと言う将来への視点がそこに窺われよう。

白族の産業を発展させる先進技術が白語で語られ白語で読めるようになり、山間部や農村の白族の手にわたること、それは直ちには無理にせよ、文字があると言うことはその可能性を高くする。報告書の中では、学生に対して三期にわたる短期研修が生まれ、刺繡・ボタン縫い・白族古典家具彫刻などについて行われた技術研修により、参加者各自の月収の向上が記されていて、農村の経済の建設に貢献したことも唱われている。

この産業技術教育への視点は1997年に、湾橋地区の役所を通して大理市人民政府に提出された「関与進一步办好大理市向陽溪白文学校的報告」ではさらに明快になる。これは、学校内に白語文を使った職業教育センターの設置を申請するものだが、そこでは白語文職業教育を基礎に、「経済や社会の発展と農村の安定して豊かな生活のために人材を養成する」目標が示されている。

この職業教育センターには、①白文コンピュータ専科、②白文観光サービス専科、③白族民族歌舞専科、④農村科学技術専科があって、それぞれ45名定員、150元の学費で1年間行われる(但し農村科学技術専科は短期研修)。この申請は、

同年のうちに大理市政府・教育局の許可がおり白語文職業教育センターが機構の中に加えられることになった、

①の白語文字によるコンピュータ専科が如何なる仕組みなのか、実際に見ていないので分からないが、現在日本でもコンピュータ関係の専門学校が時宜を得て盛んな事を考えれば、現代性も自ずから知れよう。聞くところでは白語を使うものらしい。④の農業科学技術専科も、白族の主産業である農業の生産性を上げるためには欠かせないものである。

注意すべきなのは②③だ。これは近年大理白族自治州が観光地として名を挙げた結果、その観光資源の開発に対応するものに見える。実はこの白文学校もまた、将来その中に外地からの観光客に、白族の文化を紹介するセンターの設置を考えており、校長から設計図を見せられたことがある。ただし、いまのところ建設経費の当てはない。

大理地区は今では中国はもとより、筆者の暮らす福岡市でも新聞に観光ツアーの宣伝がでる有名地になった。昔の雲南を知る者は、観光の名所にかわってしまったと嘆くものもあるが、観光の経済効果を考えれば、何時までも昔のままではいられないだろう。観光が産業となりたとえ昔は民間で行われた歌舞や技術であっても観光資源の中に組み込まれてしまえば、観光客を常に楽しませるため、専門家の養成も必要となってくる。昨春に宿泊した大理のホテル内では、白族の色鮮やかな民族衣装に着飾った女性たちを見たけれども、ホテルの外ではみな普通の衣装に着替えていたようだ。1991年の春に訪れたときには、大理市街でも民族衣装を着た白族の女性をみかけたし、1994年春の調査でも、田舎に行けば見かけることができたが、今や山間部の農村でも着るものは少なくなったそうだ。もはや民族衣装も観光と関係して着られるものになったらしい。雲南民族出版社では最近白文字による『大理旅行歌』が出版されたと連絡があったが、この書籍も大理の観光化と縁があるに違いない。この観光産業は、現在進行中の鉄道の敷設が終われば、ますます発展が見込まれる。このような現象にも、この学校はちゃんと目を向けているのである。

興味深いのは、観光産業が、他者呼び込むことで白族に白族らしさを自覚させる契機を作り、白族に新しいアイデンティティを生みだすかもしれない事だ⁴⁾。直接指摘できる関係はないけれども、近年の白語文字普及運動の盛り上がる背景には、このような観光化による民族自覚の高まりもあるように思われる。これまで見向きもしなかった特産の藍染めのシャツを着るようになったという白族の村の青年の出現に、観光産業の発展との関係が指摘されることを

考えれば⁹⁹、これはあながち無理な推測ではないだろう。

(四)

以上のように、白文学校の教育は白族の言語文化の保持ばかりでなく、白族の将来に向けての展望の上に進められようとしている。

しかし、この白文学校の基幹となる白語文字の普及運動自体は、必ずしも順調に進んで来たわけではない。例えば、調査で訪れた山間部の貧しい農村で「白語文字の学習は世界に羽ばたく羽を持つこと」と信じて学習を続ける多くの農民がいる一方、行政の力を握る白族の幹部の中には、今さら白族の間でしか使えない白語文字を習う気にはなれないという者もいる。また、漢語しか話せない白族幹部にすれば、白語文字が使用されると、今度は彼らが白語の文盲になるという恐れもある⁹⁹。この運動に携わる者の話では、正式の文字として国家に提出すれば、承認されることはほぼ間違いないらしいのだが、その前に自治州の各機関の承認を取ることが難しいという。その大きな理由がここにある。

もちろん白語文字普及運動にもいくつかの問題がある。第1に白語文字をどのように位置づけるのか、意見がまだ統一されていないようだ。というのは白語文字教育を、漢語教育への橋渡し及び文盲の追放としてのつつましかな位置づけで語る者もいれば、朝鮮族のように、白語による高等教育まで考える者もいる。また、運動として横の連絡を取りながら進めているというわけでもないらしい。自治州北部劍川県の白語文字の実験校で白語文字教育経験のある教師は、1993年修訂以前の白語ローマ字ならすらすら読めたが、修訂後の白語ローマ字にはまだ不慣れだった。白文教育の教科書として現在使われている『白文教程』も初めて見るようだった。1996年には白語と漢語の辞典『白漢辞典』(四川民族出版社)も出版されたが、これは修訂前の白語ローマ字の体系を使うので、せつかくの辞典が使いづらくなっている。

白文学校にしても、昨春の調査時の印象では、教員や物品などまだまだ不足で、計画通りに教育を進めるのも難しく思われた。

また、白族自治州とはいえ、そこも又多言語多民族地区である。白族に新文字が制定されそれが公教育に導入された場合、他の民族との関係は今のままなのかどうか。これも今後の問題として、注意する必要がある

おわりに

この白族の新文字普及運動が、今後どう進んでいくのか、現在筆者は「白族」の過去とも関係づけて、考えてみようと思っている。というのは、この問題の考察は本来多言語多文化国家であった中国の文化の性格を考える上で、さまざまな示唆を与えてくれるような気がするからだ。しかも、このような民族の言語文化の保存と、現代化への対応は、現在世界のさまざまな地域で多数民族に結果として蹴散らされつつある「弱小」少数民族が直面している大きな問題の一つでもある。とりわけ、文字のない言語を話す少数民族の場合、その国の国語によって「識字教育」がなされれば、たとえそれが善意であっても、彼ら少数者の母語本来のもつ言語と文化を大きく変えてしまいかねない現実がある⁴⁴。

多言語多民族国家中国に暮らす少数民族白族のこの試みを語ることは、世界の少数民族の生き残り戦略の一つを語ることでもある。あるいは「民族」の概念が語られることがなければ、白族は静かに漢語文化に吸収され「漢族」になったのかもしれない。「民族」が語られてしまい「白族」が成立してしまっただけでなく、今後これがどうなるのか、新文字普及運動の動向を通じて、白族が今後どういう形で漢族や他の民族と接していくか、このテーマは十分考察に値するものと思っている。

(1998/4 修訂)

注

- (1) 白族の新文字と普及運動についての全般の状況については、甲斐勝二「中国少数民族（白族）の言語文化基礎調査—白族文字方案をめぐって」（福岡発アジア研究報告 VOL. 3 NO. 2, 1994）、「中国少数民族（白族）の新文字普及運動その現状と問題点」（福岡発アジア研究報告 VOL. 6 NO. 1, 1997）を参照。
- (2) この点、平田昌二「雪晴れの風景—中国文化圏の「内」と「外」」（『中国—社会と文化』第9号1994）、横山廣子「外民族国家への道程」（岩波講座『現代中国』3 1989）に示唆に富む記述あり。
- (3) 横山廣子「少数民族の政治とディスコース」（岩波講座『文化人類学』第五巻「民族の生成と論理」1997）参照。
- (4) 藤沢義美「南詔文化と漢文化」（『西南中国史の研究』、大安1963）
- (5) S. R. ラムゼイ『中国の諸言語』（大修館1990）参照。
- (6) 横山廣子「白族—多数者の文化を受容しながら生きる民族」（『文化人類学』7 1990）
- (7) 例えば張貢新氏は「故郷で白語を話さなければ、白族の根本を忘れたものと批判される」（『剣川県第1箇推進白文的歴史的意義』『雲南語文』1989—3）と言い、董健中氏は「白族をまとめているのは言語だ」と指摘する（『認真総結白族的歴史与現状

推行白文振興白族」『白族学研究』4 1994内部発行)。

- (8) この方案は漢語のローマ字表記(ピンイン)に対応するようにローマ字で作られており、漢語普通話の発音学習にも効果が上げられる。具体的紹介は注(1)の文献参照。
- (9) 或いは言葉というのは本来このような文化接触の相互影響のもと吸収されたり、分かれたりする流動的なもので、「国」や「民族」または「文化集団」はもとより、文法・音韻体系すら固定させて考えることに問題があるのかも知れない。もしそうだとすれば、現在世界中で起こっている自然言語の激減も、文化接触の過程で起こる必然的なもので、それを嘆くのは言語を固定して考える者の感傷にすぎなくなるのだろうか。
- (10) 「雲南省大理市向陽溪白文学学校首届白文班総結」(大理市向陽溪白文学学校内部資料 1995/8/20)
- (11) 太田好信「文化の客体化—観光を通じた文化とアイデンティティの創造」(『民族学研究』57—4, 1993) 参考。
- (12) 横山廣子「雲南ペー族の村からみた中国社会の変動過程」(『東アジアの現在』風響社1997)
- (13) 白族知識人の話では、白語の話者が漢語を学ぶより、漢語の話者が白語を学ぶ方が難しいらしい。
- (14) この点、現在ユネスコが進めている国際的な識字運動も、文字のない言語の話者にどう対応するべきか大いに考える必要がある。「国語」の単位で考えれば、識字運動は成立しても、文字を持たない言語から考えれば、そもそも識字自体が成立しないからだ。その場合識字運動が、母語ではない「国語」を学ばせ、「国語」を読み書きできることで、文化知識の向上を目指すのだとすれば、それは文字を持つ「国語」の優越性を高め、持たない言語の消滅に手を貸すことになる。近刊の『中国の識字運動』(東方書店 1997)ではこの問題にも触れてほしかった。ただし、もし母語とは違う「国語」でも「それによって手に入る生活の方が幸せだ」と使用者が考えるのであればやがて「国語」を好んで使うようになるだろう。多くの言語や方言がかくして消えて行くことになる。

(福岡大学)